



この地とともに
学び、歩む。

Fukushima Ism

福島イズム

街へ出よう。仲間と共に地域（フィールド）に入ろう。

ここでずっと暮らしてきた人々の声に耳をすまそう。

それがどんなに小さな声で、実現が容易ではないことであっても。

君たちが歩むのは、まだ誰も歩いたことのない道。

復興への想いと、難題に立ち向かう精神があれば、きっと越えていける。

青空に高く高く、希望の旗を掲げよう。



INDEX

01	福島イズム
03	学長メッセージ
05	福島大学の研究紹介
07	福島国際研究教育機構 F-REI
09	foR プロジェクト
11	「解のない問い」にチャレンジ
21	学類・コースINDEX
23	人間発達文化学類
24	社会で活躍する卒業生
25	カリキュラムの特長
27	学類長メッセージ
28	実習ピックアップ・教員紹介
29	コース紹介
33	行政政策学類
34	社会で活躍する卒業生
35	カリキュラムの特長
37	学類長メッセージ・教員紹介
38	学びピックアップ
39	1年次の学び
40	2年次の学び
	地域政策と法コース
	地域社会と文化コース
42	3年次・4年次の学び
43	夜間主紹介
45	経済経営学類
46	社会で活躍する卒業生
47	カリキュラムの特長
49	学類長メッセージ・教員紹介
50	活動ピックアップ
51	経済学コース
52	経営学コース
54	コース横断プログラム
55	共生システム理工学類
56	社会で活躍する卒業生
57	カリキュラムの特長
59	学類長メッセージ・教員紹介
60	履修基準表
61	コース紹介
63	施設や教育プログラム
65	食農学類
66	社会で活躍する卒業生
67	カリキュラムの特長
69	学類長メッセージ
70	1年次の学び・教員紹介
71	2年次の学び
72	コース紹介
73	2年次前期～3年次の学び
75	大学院
77	キャンパスマップ
79	フクニチャージ図書館・食堂・生協・年間スケジュール
81	福大生が語る「福大キャンパスライフ」
83	STUDENT'S LIFE
85	クラブ・サークル活動の紹介
87	就職・進路支援
88	進路状況
89	入試データ
90	学費・奨学金

President
Message

地域と共に 21世紀的課題に 立ち向かう福島大学

福島大学学長 三浦 浩喜



福島大学は、福島県唯一の国立大学法人として、長きにわたり地域とともに歩みを進めてきた大学です。本学は、人間発達文化学類、行政政策学類、経済経営学類、共生システム理工学類、食農学類の5学類からなる総合大学で、各学類は、学問分野に沿って細分化されたコースで編成され、それぞれカリキュラムの下で学生が学び、専門性を深めています。

本学は学際性を重視しています。独自の「学類」制は、一般的な「学部」と比べてカリキュラムに、より柔軟性を持たせることができます。他学類の授業を受講するなどして、今日強く求められている幅広いものの見方や多視点の学びを得ることを目指しています。「問題解決を基盤とした教育」を理念とし、「解のない問いにチャレンジできる人材」の育成を目標に掲げています。今から13年前の東日本大震災、それに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故で、本学は発災直後から、避難所の開設と運営、県内外での学生ボランティア活動、地域の放射線の測定、被災地の実態調査など多面的に支援活動を行い、これらは本学の大きな財産となりました。

「問題解決を基盤とした教育」には、震災復興の様々な

活動で得た復興知を教育課程に組み込んでいくと同時に、教科書の中に閉じ込められている知識を一方的に教わるだけではなく、学生自らが複雑な現実社会に飛び込み、一人ひとりが自分なりのアプローチで問題を発見し、仲間とともに探究し合い、自分自身の生き方や社会のあり方を熟考してもらいたいという願いがこめられています。この理念を実現するカリキュラムとして、「地域実践特修プログラム」をあげることができます。これは、主として講義科目「ふくしま未来学入門Ⅰ/Ⅱ」とフィールドワーク科目「むらの大学」などの問題探究科目で学んだ事柄を、自主学修プログラムや各学類の専門科目に広げていく科目群です。大学の教室で、また、浜通りの被災地で、過疎化に直面している町で、様々な講師や現地の人々に学び、震災からの復興の歩み、地域の生の課題などを立体的に学ぶことができ、国内外から高く評価されています。

さらに、昨年から「地域×データ」実践教育推進室を立ち上げ、この地域実践型教育とデータサイエンスを掛け合わせて、今日必要とされるEBPM（証拠に基づく政策立案）人材の育成を始めました。これを通して、新しい社会のあり方を考え実行するイノベーターの育成を目指しています。

福島大学は、福島市南部の金谷川キャンパス内に全ての学類がまとまって設置されており、主として1、2年生が受講する基盤教育科目は学類を越えて多様な学生が授業に参加します。課外活動（部活動、サークル等）も盛んで、ユニークな活動に取り組む学生同士が出会い、そこからまた新しい活動が日々生まれています。本学は、開学以来学生の自主性を尊重する伝統が貫かれ、加えて、学生と教職員が互いに権利を守り、協力して大学を発展させる自治の精神が生きており、キャンパスの中には社会の多様性や自律性を考える機会がたくさんあります。大震災を乗り越えてきた本学は、13年を経ても様々な困難や課題に寄り添う姿勢が息づいており、今なお活発なボランティア活動にその片鱗を見ることができます。

さて、3年にわたって社会に脅威を与えてきた新型コロナウイルス禍が次第に遠のきつつありますが、ロシア軍によるウクライナ侵攻や中東パレスチナ問題などにより、世界の平和は揺るがされ、政治や経済が大きく混乱しています。国際社会における日本の在り方や位置づけも、変化の時代を迎えています。

東日本大震災は1000年に一度の大災害と言われ、新型コロナウイルスとの闘いは100年に一度の災禍、ウクライナ紛争は第二次世界大戦後最大の危機と言われました。足元では、人口減少・少子高齢化、気候変動が深刻化しています。福島大学は困難を乗り越えて発展してきた大学、言わば「レジリエンス（復元力・反発力）の大学」ともいえます。「ピンチの時こそがチャンスの時」、このようなときこそ、幅広いものの見方、深い問題意識、最先端の技術、それらを社会に応用する実践力等を身につけるべき格好の機会です。様々な困難に直面する時代に生まれ、成長する皆さんこそが、本学での学びを糧にして、これからの新しい社会を作る原動力になるものと確信しています。

「福島大学でしか学べないこと」がたくさんあります。本学での学びや経験は、よりよい自分自身のあり方、よりよい社会のあり方を実現する基礎となります。共に福島大学で学びましょう。

最後になりますが、令和6年1月1日に発生しました令和6年能登半島地震でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。被災地の1日も早い復興をお祈りいたします。

革新と協働で 様々な課題に取り組む

PICK UP



“Think Globally、Act Locally”が 実践できる福島のフィールドへ

共生システム理工学類 川越 清樹 教授
専門：防災工学、河川工学、水文学、水工学、環境影響評価

気候変動による温暖化が進み、地上の水循環システムの変化を求め、災害のリスク、水環境への影響を予測しています。影響を予測するためには、現在を知ることも重要で、フィールドに出向いてドローン等を利用した調査も行っています。身近なところでは阿武隈川、2023年に線状降水帯による豪雨災害が認められたいわき市、また、奥会津ではニホンジカの食害を調査しています。国内外の気候変動の影響の研究は、各分野の影響を単独の事柄で評価する例が多かったです。しかし、地上の水循環システムの基点となる山地を例にすると、気候変動により森林の適域が変化すること、生物の行動範囲が広がり食害の影響が変化すること、強雨が降りやすくなること等、様々な現象が複合化します。複合化した現象を踏まえながら、水循環とそれに付随する土砂の流れを推定して、様々な視点のリスクや影響を解析しています。

また、福島県と国立環境研究所と連携、協働して、カーボンニュートラルと気候変動の適応策や緩和策を誘導できる影響評価データを開発し、SDGsへの貢献を図っています。これらのデータから、具体的な方法やインフラによる対策を検討しています。また、最近では「ふくしまのかんきょう」という小学生向けの副読本に協力しました。SDGsの達成には、具体的な方法、対策と並行して人材育成することが不可欠です。「ゼロカーボンデー」、「ふくしまミライセッション」等の市民の方々とお話できる機会があれば、可能な限り研究の情報を共有するよう努めています。地球規模の視野で考え、福島をフィールドに地域の視点でも行動しながら研究を進めています。



**複雑な現象を捉えて、市民にもわかりやすい
アウトプットで情報共有化**
できるだけ研究成果を自分事、我ら事として捉えられるように努めています。研究のアウトプットは福島県環境創造センター交流棟「コミュニティふくしま」にあるプロジェクションマッピング(3Dふくしま)にも提供しています。



過去に学び、現在を知り、 将来を考えるための基礎データ収集

将来の安心、安全を考えるためには、過去の経験と現在の問題改善に取り組むことが必要です。そのため、流域圏の問題を捉えるために、フィールドに出て、水、土砂等の地球環境とそれを取り巻く社会環境の現象を調査します。



調査による地域のデータを 最新のテクノロジーも用いて解析

地域で収集した調査結果、ドローンにより取得した山地や河川の地形、林床を含む土地被覆、土壌状態を解析に用います。ドローン操作の技術を身に付ければ、迅速な災害対応にも役立ちます。

地域と共に在るために

東日本大震災、東京電力福島第一原発事故によってもたらされた様々な問題はもとより、人口減少や少子高齢化の問題は震災により10年早まったと言われています。東北を始め、これから日本全体で起こる社会の変容や問題に対応し、福島大学では地域の方々と共に地域の課題解決に取り組むのはもちろん、自治体や企業と協働してこれからの「新しい社会」を実現する研究に取り組んでいます。ここで学び、研究したことを社会に還元し、役立てること———それこそが福島大学がこの地に存在するゆえんです。

PICK UP

食品から得られる健康機能性を研究 美味しく食べて、いつまでも健康に

食農学類 升本 早枝子 准教授
専門：ポリフェノール、腸内細菌、認知機能

専門は食品機能学、栄養学、栄養生理学で、果物や野菜などの農産物を中心に、食品が疾病予防や健康増進に与える効果について研究しています。特にポリフェノールが持つ肥満や糖尿病、生活習慣病への効果を調べてきたのですが、さらに老化、認知機能に与える影響についても研究を進めています。

北里大学獣医学部(青森県)で教えていた時に東日本大震災があり、当時は何もできず心残りがあったので、福島大学で教えるご縁をいただき、何か貢献できればいいなという思いもありました。私の専門である「食」については風評被害の問題も多かったので、食育を通してそれを払しょくできないか考えています。若い世代が自分が得た知識でしっかりと考え、情報を取捨選択して賢い消費者になるよう、私の研究を通して伝えていければと思っています。

農業は作物を育てるだけではありません。食農学類では生産から経営まで、様々な分野を学ぶことができます。企業に就職するにしても現場を知り、多角的にものを見ることができるのは、とても大事なことだと思います。



他大学を凌駕する 実験機器類の充実度

日本に数台しかないような質量分析器があり、しかも他大学と違い、それを学生が自分で操作して分析出来るということは、非常に大きなメリットです。



食品の持つ健康機能性の メカニズムを分析・評価

食品が人々の疾病予防や健康増進に与える効果について科学的に検証。機能以上に安全性が重要視される「食」という分野ゆえ、正確な分析・評価が求められます。



つくば万博で抱いた科学や研究者への憧れ

当時の万博は子どもにもわかりやすく、近未来的なものに憧れました。中学で陸上競技をやっていた時に貧血や疲労骨折になり、食事の大切さやスポーツ栄養学に興味を持ちました。

福島、そして世界の課題解決に向けた福島大学の研究

福島国際研究教育機構 (F-REI)への参画

福島国際研究教育機関(Fukushima Institute for Research, Education and Innovation、通称F-REI)の
公募事業に福島大学で行われている研究・事業が採択されています。
機構が取り組むテーマの内、4分野6研究が令和5年度は採択されました。福島をはじめ、東北の復興の実現が期待されます。

令和5年度 事業内容

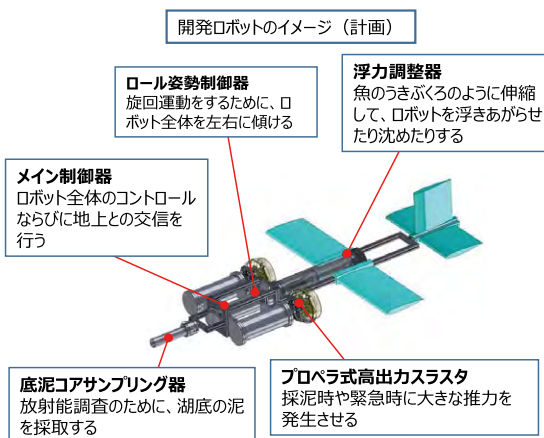
第1分野 ▶ロボット◀

◆環境放射能動態調査のための 水中ロボットの開発と その応用に関する研究

共生システム理工学類: 高橋 隆行 教授(代表)

事業内容

水中の調査活動におけるロボットの活用を図るため、東京電力福島第一原子力発電所事故に起因する環境放射能の動態研究への応用を主として想定し、水深100m程度、淡水での底泥コアサンプリングを行うことのできる水中ロボットを開発する。



第2分野 ▶農林水産業◀

◆土壌低分子有機物の植物栄養学的影響の解明

食農学類: 二瓶 直登 教授(代表)

有機物の分解産物である低分子有機物が植物栄養における炭素源、窒素源となるという作業仮説を実証し、低分子有機物吸収メカニズムや根圏環境における植物-微生物間の物質輸送を解明し、その制御機構を明らかにする。さらに、植物が低分子有機物を有効利用する施肥条件を解明し、土壌肥沃度の新たな指標として安定生産に寄与する低分子有機物を導入することで、やませなど不安定な天候が懸念される浜通り地域に広がる除染圃場での効果的な農地再生を実現することを目的とする。

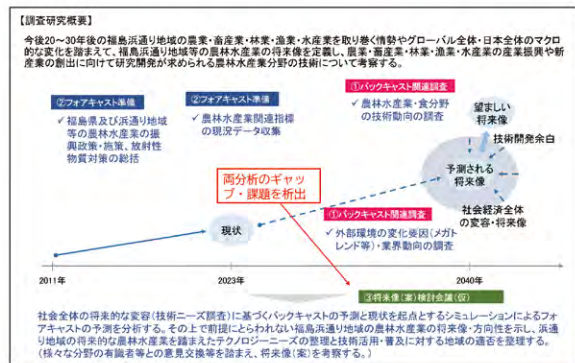


第2分野 ▶農林水産業◀

◆福島浜通り地域等の 農林水産業の未来デザイン

食農学類: 小山 良太 教授(代表)

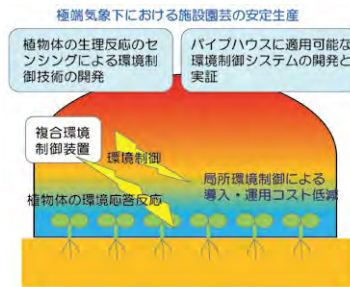
社会全体の将来的な変容(技術ニーズ調査)に基づくバックキャストの予測と現状を起点とするシミュレーションによるフォアキャストの予測を分析する。その上で前提にとられない福島浜通り地域の農林水産業の将来像・方向性を示すため、様々な分野の有識者等との意見交換等を踏まえ、将来像を考察し、浜通り地域の将来的な農林水産業を踏まえたテクノロジーニーズの整理と技術活用・普及に対する地域の適否を整理する。



◆極端気象に適應する 次世代型ハウス環境制御技術の開発

食農学類: 深山 陽子 教授(代表)

福島県を含む我が国でもっとも多いパイプハウスを利用した施設園芸をターゲットに、近年発生頻度が高い短期間の急激な気象条件変化に適應可能かつ持続的利用が可能な技術の開発と実証試験を行い、安定した生産と営農の実現に貢献する。

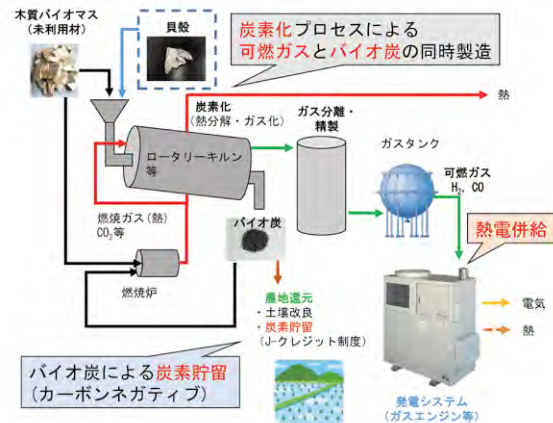


第3分野 ▶エネルギー◀

◆浜通り地域の資源を利活用した 高効率・循環型ネガティブエミッション・ 地産地消システム

共生システム理工学類: 浅田 隆志 教授(代表)

未利用材等のバイオマスの炭化プロセスにおいて生成する水素や一酸化炭素等の可燃ガスを燃料としてガスエンジン等を用いて熱電供給するエネルギー利用システムを開発し、さらに、炭化プロセスにおいて同時に製造されるバイオ炭を農地施用することにより炭素貯留するネガティブエミッション技術を構築する。



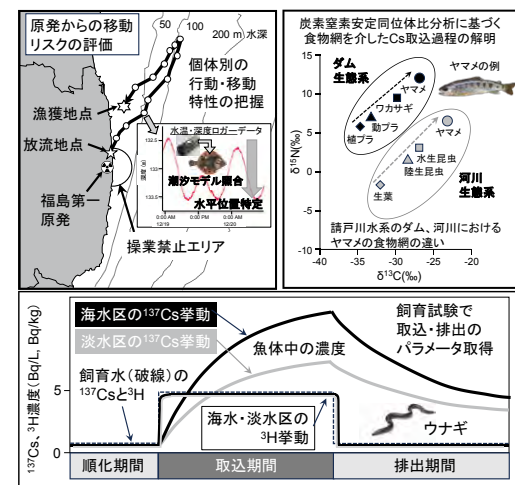
第5分野 ▶原子力災害に関するデータや知見の集積・発信◀

◆原子力災害に関するデータや 知見の集積・発信 (放射性物質の魚類への取込・排出メカニズム)

環境放射能研究所: 和田 敏裕 教授(代表)

事業内容

原発事故からの時間経過とともに、放射性セシウムの基準値(100Bq/kg)を超える水産物の割合は低下している。一方、原発周辺の水域に生息する一部の魚類では、基準値を超える事例も報告されている。本事業では、原子力災害に関するデータや知見の集積・発信の一環として、放射性物質の魚類(海水魚及び淡水魚)への取込・排出メカニズムを多面的なアプローチで解明することにより、水産物の安全性の評価などに必要となる科学的な知見を整理する。



福島県が抱える課題を解決へ

foRプロジェクト



福島大学では「福島での課題解決」に結びつく研究を、重点研究分野「foR プロジェクト」に指定しました。震災や原発事故による深刻な地域課題の解決に向け、研究が加速することが期待されます。

※「R」はResearchの頭文字です。

foRプロジェクト採択事業一覧(4件)

■福島型 STEAM 教育の開拓

人間発達文化学類: 中田 文恵(代表)、新井 浩、初澤 敏生、渡邊 晃一、鳴川 哲也
共生システム理工学類: 岡田 努、馬場 一晴

■脱炭素型エネルギーシステムの構築: 水素をつくる・つかう技術の多様化

共生システム理工学類: 大山 大(代表)、浅田 隆志
森林総合研究所: 小井土 賢二
福島県立医科大学: 田辺 真

■ゲノム科学・技術を援用した栽培・発酵好適性イネ系統の開発基盤研究

食農学類: 松田 幹(代表)、松岡 信、小山 良太、藤井 力、高橋 秀和、吉田 英樹、菅波 真央、客員教授: 北野 英己、吉田 晋弥

■官学連携による「住民参加型行財政システム」の構築に向けた実証的研究 -人材育成に向けた「公共政策プログラム」の開設を通して-

経済経営学類: 藤原 遥(代表)、村上 早紀子
行政政策学類: 岸見 太一
法政大学: 林 嶺那

◆福島型STEAM教育の開拓

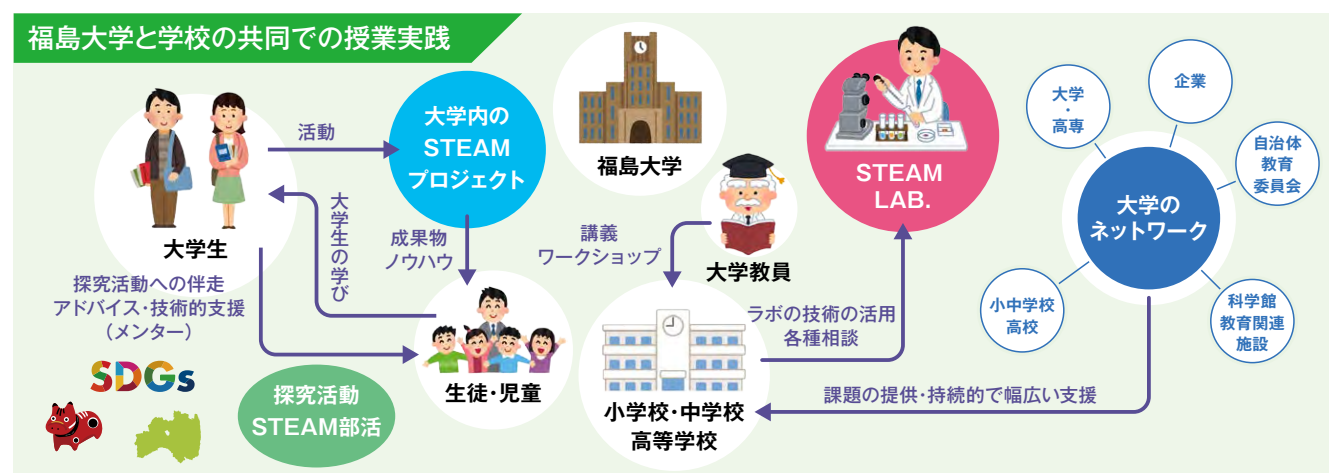
研究目的、成果報告

AIなどの技術革新により、「決められた作業を早く正確にこなす能力」よりも「解のない問いにアプローチする創造性や協調力」などの「非認知型スキル」が必要とされる時代になりました。このような力を育てるため、STEAM教育をはじめとする分野横断的・探究的な学びの重要性が叫ばれています。本プロジェクトでは福島大学における基盤的なSTEAM教育体制の構築や、STEAMエコシステム(福島県内の学校や様々な団体と連携してSTEAM教育を支える体制)の構築を目指し、令和3年8月から活動を進めました。

これまでに、基盤教育科目「STEAM実践学修」の開講、「STEAM FESTIVAL」の開催といった活動を行いました。令和6年4月からは「STEAM研究所」を立ち上げ、その活動と機能を引き継いでいます。



福島STEAMエコシステム



◆ゲノム科学・技術を援用した栽培・発酵好適性イネ系統の開発基盤研究

研究目的、成果報告

かつて国内で広く栽培されていましたが、その後、近代育種により生み出された優良新品種により淘汰されていった古代米在来品種、言わば「古き良き時代の米」を復刻して、現代的な付加価値も含めて再評価する研究を進めています。栽培イネ育種の長い歴史の間に失われた多くの野生型遺伝子を保有する品種はゲノム情報や遺伝資源の多様性確保という観点でも極めて重要です。かつて福島など東北地方で栽培されていた在来品種の中で、特に近代的な育種が始まった江戸時代よりも以前の品種に着目し、関連する歴史的資料、文献等を調査研究して、農研機構遺伝子バンク等の保存種子リストの中から、栽培適性と玄米の質が良好な「白早生(しろわせ)」を復刻米候補に選抜しました。50粒の種籾から増やしていった200kgほどの米を収穫しました。現代の米と比べてタンパク質含量が3割程度高い「高タンパク質米」であることが分かりました。現在、地域の発酵醸造関連企業のご協力をいただき、白早生を原料米とする日本酒、甘酒、米味噌などの発酵醸造食品の試作を行っています。



登熟期のイネ: 左側の早生系統と右側の晩生系統



白早生6361の稲穂: 長い芒(のげ)が特徴

◆脱炭素型エネルギーシステムの構築: 水素をつくる・つかう技術の多様化

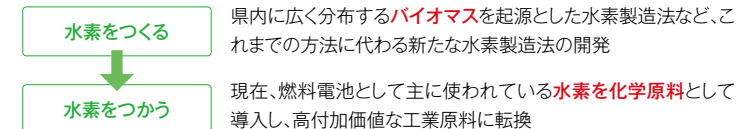
研究目的、成果報告

世界中の国々はカーボン・ニュートラルヘシフトしています。日本でも、特に福島県は利用時にCO₂を発生しない「水素」という新エネルギーに注目し、全国に先んじて水素社会の実現に挑戦しています。私たちは、木材等の生物資源(バイオマス)から水素を製造する手法、製造した水素を化学原料として様々な物質へ導入する手法を研究しています。

●カーボン・ニュートラルに向けた水素の役割

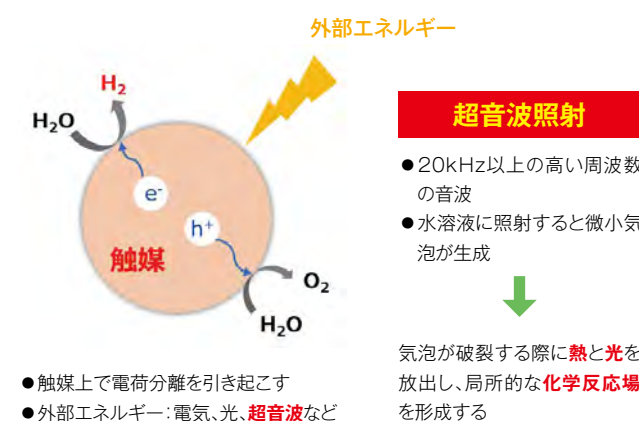
- (1) 燃料・原料としての化石資源を代替する役割
- (2) 再エネ由来の電力余剰あるいは未利用分を貯蔵する役割

●プロジェクトの目的



超音波照射による水からの水素製造

●水の分解における触媒の役割と超音波



バイオマス起源の水素製造

●炭化によるバイオマスからの水素製造



福島大学の教育



解のない問いに チャレンジ

解のない問いに
チャレンジ

自分を知る

自分自身のことを知る

福島大学が大切にしているものの一つに「自己の振り返り」があります。自分自身の長所や特徴を知ることが、学びと自立の第一歩だと考えるからです。自分はどんなことが得意なのか、特に何に関心があるのかを客観的に見つめることは、自分がどんな社会を創造したいのか、その未来にどんな方法で関わっていききたいのかに気づくきっかけにもなります。

在学中は Semesterごとに学修目標を自分で設定し、どのような能力を伸ばすのか、どのように伸びたかを「見える化」し、自己評価(振り返り)を行います。この一連のサイクルを4年間繰り返すことで、学びと自己研鑽を深化させ、自身の取り組むべき課題を発見することができます。



解のない問いに
チャレンジ

未来を考える

自分の、地域の、 世界の未来を想像してみよう

皆さんが「未来」を考える土台を形成するために、本学では高校までの学びと大学での学修をつなげる教育体系として、「基盤教育」を充実させています。大学で学ぶ上で必要な基礎能力を身につけるための「接続領域」、幅広い教養の基礎を形成する「教養領域」、現実の問題をフィールドワークやグループ学修を通して解きほぐしていく「問題探究領域」を設定し、現状を分析する力や問題解決のための能力を丁寧に育みます。そして文系・理系を問わず、分析や問題解決のツールとしての基礎的な数学や理工学を理解し、社会に有益な知見を引き出すデータサイエンス教育にも力を入れています。

未来をつくるのは、皆さん一人ひとりの力です。自分が何をしたいのか、何ができるのか。地域や世界で、どんな未来を創造していくのか。福島大学でともに考え、学んでいきましょう。



解のない問いに
チャレンジ

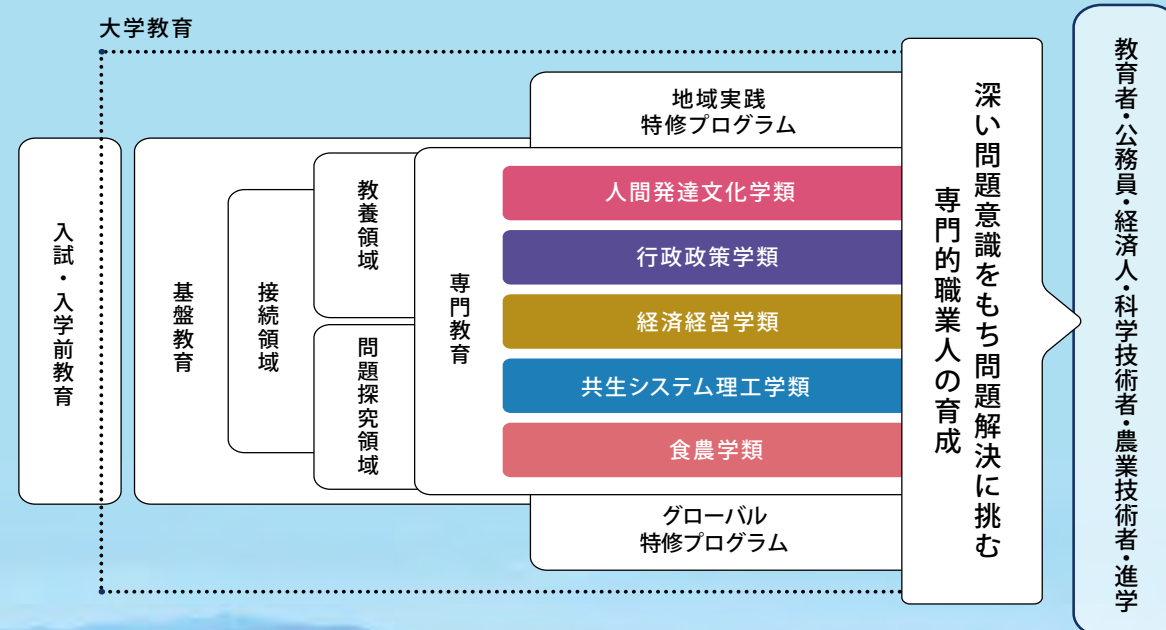
福島大学でしか 学べないことを学ぶ！

福島県は、2011年3月、東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故に見舞われ、甚大な被害を被り、「Fukushima」は世界に知れ渡ることとなりました。

福島大学は東日本大震災以降、被災地のフィールドワークや地域おこし、再生可能エネルギーなどの人材育成に取り組み、ユニークな教育を進めてきました。

世界も、日本も、地域も、大きな変化の中にあり、たくさんの課題を抱え、容易に「答え」を導き出せない問題に満ちあふれています。福島大学は「解のない問い」にチャレンジする学生を育てる教育を創造します。

福島大学における教育体系のイメージ



1
入学から卒業まで、
手厚く教職員が
サポートします。



入学前教育—入学後のサポート—授業・学修—サークルやボランティア—留学などの各種活動—就職支援—卒業研究、などの4年間の学生生活を、一貫した体制でサポートしていきます。これによって、誰でも目標に向かって意欲的に大学生活を送ることができ、さまざまな活動にチャレンジできます。

2
情報教育を
実践的に
変えていきます。



現代の情報化社会にふさわしい教育体系に変えていきます。各自がパーソナルコンピュータを通して、学内外のさまざまな情報にアクセスし、情報の収集や分析、まとめ、プレゼンテーションを実践します。21世紀の読み・書き・計算を身につけます。

3
初年次の
基盤教育を充実させます。



1年次生が学ぶ初年次教育（教養教育）は、本学独自の教育体系です。高校までの学び（教科書に書かれた知識を学ぶ）を大学での学修（自ら主体的に学ぶ）につなげる教育体系として「基盤教育」を充実させました。入学後、大学での学びを身につけるためのスタートアップとしての「接続領域」、幅広い教養の基礎を形づくる「教養領域」、現実の問題をフィールドワークやグループを通し、時には一人で、時には学生間で意見を交わし課題を深く掘り下げ、そして解きほぐしていく「問題探究領域」が設定されています。

4
地域に学ぶ活動を
強化します。



地域は多様な課題を抱えています。「地域実践特修プログラム」の「ふくしま未来学」を中心として、本学で学べる地域学修を広げ、地域の現状に触れ地域で活動する学修を増やし、問題探究・問題解決の力を伸ばします。

5
身につけた力を
「見える化」します。



科目や科目群の学修目標を明示して、どのような能力を伸ばすのか、どのように伸ばしたのかを情報技術を使って「見える化」します。アクティブラーニングや実践的な学修を取り入れ、学生の学びを活性化させます。

6
グローバル教育を
充実させます



学類を超えて、語学教育をグレードアップし、欧米圏やアジア圏との国際交流の機会や、海外留学を希望する学生にさまざまな情報や機会を提供します。

7
キャリア教育と
就職支援を
強化します。



本学で先進的に取り組んできたキャリア教育をさらに発展させます。自治体や企業との連携を強化し、インターンシップの機会や就職支援を充実させて、就職に強い人材、社会に出て魅力的な仕事ができる人材を育てていきます。

足とデータで 地域 の未来をひらく力を 「地域×データ」 実践教育推進室

2023年4月、福島大学では教育推進機構内に「地域×データ」実践教育推進室を新たに設置しました。

「地域×データ」実践教育推進室は、地域の現場に根差しながら課題を実証的に発見・分析・解決する力を身につけ、地域におけるEBPM（Evidence Based Policy Making：証拠に基づく政策立案）に精通した人材の育成をミッションとし、全学的な実践教育プログラムである「地域×データ」実践教育プログラムの開発・運営を行っています。

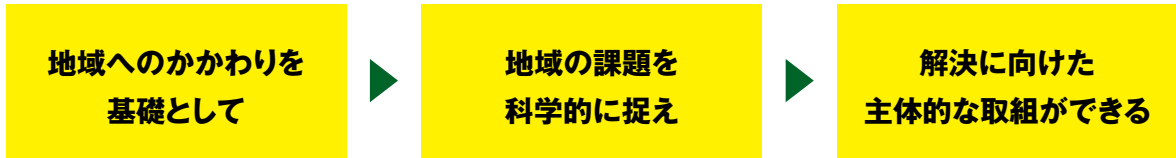
「地域×データ」実践教育プログラム

全学を対象とする「地域×データ」実践教育プログラムは、「地域×データ」実践教育推進室開講科目など基盤教育科目と、各学類の専門科目によって構成されています。

本プログラムでは、「むらの大学」「自主学修プログラム」などのフィールドワーク科目による地域実践教育と「福島大学『解のない問い』に挑むデータサイエンス教育プログラム」などのデータサイエンス実践教育を掛け合わせ「地域へのかかわりを基礎として、地域の課題を科学的に捉え、その解決に向けた主体的な取組ができる個人」の育成を目指します。

また、本プログラム対象科目を履修し、必要な単位数を取得した学生に対しては、大学卒業時にプログラム修了を認定します。

「地域×データ」実践教育プログラムの目指す人物像



「地域×データ」実践教育プログラム 履修基準表

領域・科目区分		開設科目等	必修	要認定単位数
基盤教育	スタートアップ科目	社会とデータ科学の基礎	2	12
	学術基礎科目	「地域×データ」実践教育プログラム科目	—	
	問題探究科目	問題探究セミナーⅠ	2	
		ふくしま未来学入門Ⅰ・Ⅱ	2	
		むらの大学Ⅰ・Ⅱ	—	
		データ分析入門、福島の地域データ、データサイエンス実践演習	—	
		EBPM入門、地域課題と探究指導、地域課題とビジネス、地方と若者	—	
		その他の問題探究科目	—	
専門教育	自主学修プログラム（地域実践）		—	12
	問題探究科目	問題探究セミナーⅡ	2	
	学類専門科目	「地域×データ」実践教育プログラム科目	—	
上記の基盤教育または専門教育から				6
「地域×データ」実践教育プログラム修了認定に必要な単位合計				30

※「地域×データ」実践教育プログラム科目など、プログラムの詳細は学修案内やシラバスを参照してください。

データサイエンス実践教育

データサイエンス実践教育では、積み上げ式と地域における実践を重視した教育を展開しています。

「『解のない問い』に挑むデータサイエンス教育プログラム」を構成する3科目を中心としながら、学生の関心に合わせた多数のデータサイエンス科目を開講しています。



社会とデータ科学の基礎（1年・前期）

- 調査の方法論やデータサイエンス・AIの応用例をとおして、データを構築したり、適切なデータ分析を行ったりするために必要な基礎的な考え方やスキルを学ぶ授業です。
- 質的調査と量的調査の基礎を学修できるほか、学生の専門分野に応じて各学類で数理・データサイエンス・AIの応用例に関する講義を開講しています。
- 2023年度より全学類の1年生を対象に必修化しています。

データ分析入門（1年以上・後期）

- 科学的な考え方を学ぶとともに、実際に自ら手を動かすことでデータ分析の基本を学ぶ授業です。
- 自らの手でデータを可視化・分析できるよう、福島県に関するデータなどを用いた演習を中心とした授業となっています。
- より多くの学生が受講できるよう定員枠を拡大しています。



データサイエンス実践演習（2年以上・後期）

- データサイエンティストに求められる基礎スキルとビジネス現場での活用事例を学び、さらにプロジェクト型演習を通じてデータ分析を活用した課題解決・提言の一連の流れを経験し、理解を深める授業です。
- 福島県内の自治体から実際のデータを提供していただき、地域の課題解決に向けた一連のプロセスをプロジェクト型学習の形で学ぶことができます。



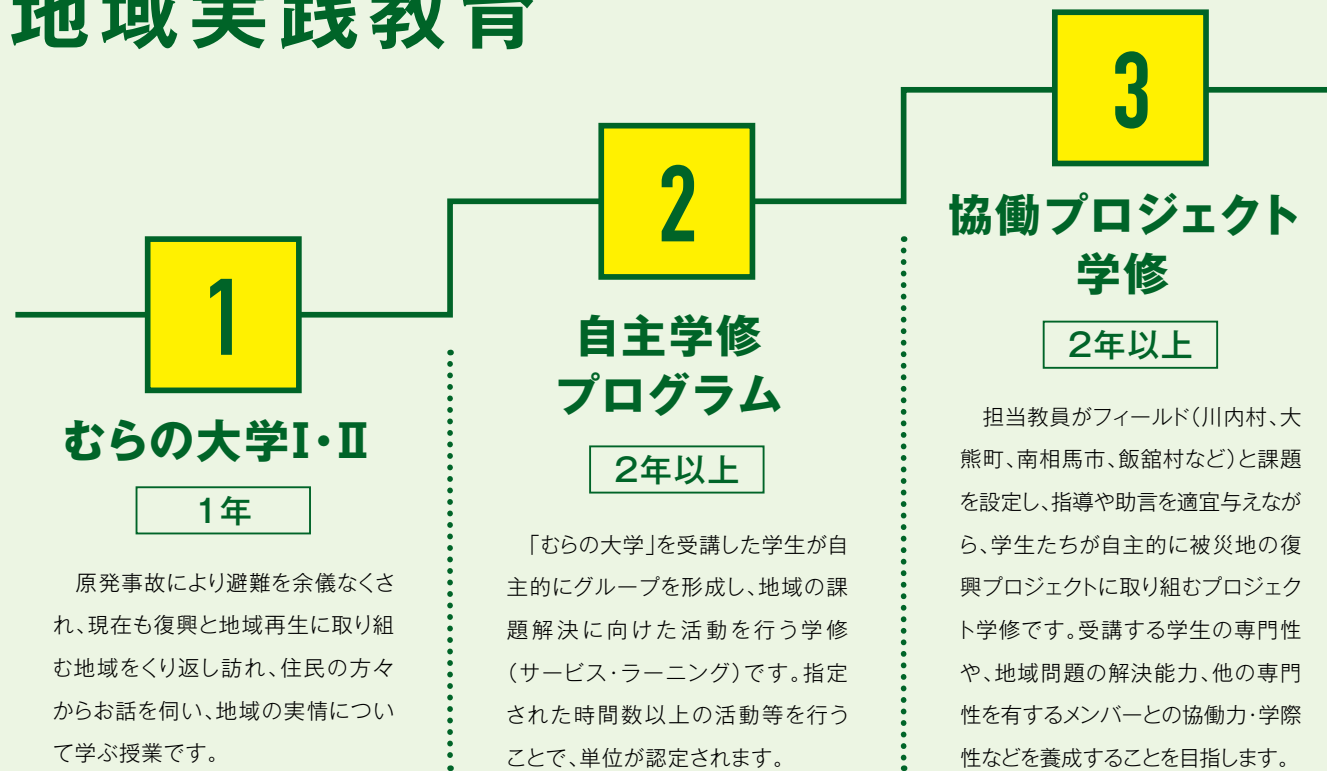
「社会とデータ科学の基礎」「データ分析入門」「データサイエンス実践演習」は「『解のない問い』に挑むデータサイエンス教育プログラム」として文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」に認定されています。

2024年度新規開講科目

2024年度から以下の科目を新たに開設しました。学生それぞれの関心に応じた多様な科目を、地域における実践を重視した内容で展開していきます。

- 福島の地域データ（全学年・前期）
- 地方と若者（全学年・前期）
- EBPM入門（3年以上・前期）
- 地域課題とビジネス（3年以上・前期）
- 地域課題と探究指導（3年以上・夏季集中）

地域実践教育



学内では

ふくしま未来学入門I・II

全学年

- 東日本大震災と福島第一原発事故が、人々にどのような影響をおよぼし、復興に向けてどのような取組がなされているのかを、福島大学の全5学類ほかの教員や多彩なゲスト講師から学ぶオムニバス形式の講義です。
- 現場での実体験を聞くという地域実践的な学びに加え、数値データを活用した学びの観点を取り入れています。

むらの大学I・II（1年）

原発事故からの復興に取り組む地域（川内村、大熊町、南相馬市小高区、飯舘村）をくり返し訪れ、住民の方々からお話を伺うインタビューとアーカイブ（記録を残す）活動や地域イベントのお手伝いなどを通じて、地域を深く学ぶ授業です。

より多くの学生に地域に足を運んでもらえるよう、定員枠や地域の拡大、スポットプログラム（合宿版むらの大学）の新設を行っています。

※フィールドワークにかかる自己負担費用は原則、食費程度です。



自主学修プログラム・協働プロジェクト学修（2年以上）

学生が被災地で課題を発見し、自主的に復興に取り組むプロジェクト学修です。文系・理系の5学類が1つのキャンパスに集まる総合大学の強みを活かし、異なる専門性を持つ学生と協働しながら課題解決を図ることで、実践的な力を身につけます。

主なプロジェクト例

- 地域の特産品を使った六次化商品の開発
- 祭礼やイベントの支援活動とアンケート分析
- 除染土処分に関する学生ワークショップ
- 農地・農作物の放射性セシウム移行調査
- 被災地での教育環境を考える など



みらいバス

地域と大学をつなぐ「みらいバス」は、学生・教職員を対象とした日帰りのスタディツアーです（参加費は原則無料）。授業以外で地域を訪問するきっかけをつくるため、年間10回程度実施しています。被災地域の訪問・見学やボランティア活動を通じ、それぞれの地域の現状を学びます。

主な行き先

- 東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉郡双葉町）
- 震災遺構請戸小学校（双葉郡浪江町）
- 大野駅および周辺市街地、中間貯蔵施設（双葉郡大熊町）など



アーカイブ

Archive

「むらの大学」の授業で、学生たちは地域住民の方にインタビューを行い、記録をまとめた小冊子を作成します。原稿の編集作業や追加取材、ご本人への確認なども全て学生たちの手で実施します。

小冊子に加え、インタビュー全文をホームページにアーカイブとして公開しています。

<https://region-data.net.fukushima-u.ac.jp/archive/>

インタビュー全文はこちらから▶



解のない問いに
チャレンジ

世界で学ぶ

国際交流

福島大学には、多彩な国際交流の機会が用意されています。
多くの留学生が在籍しているのも本学の特徴。国際交流は、キャンパスの中からはじまっています。

今の自分から、一歩前へ バディ制度

活動期間：数日～6ヶ月程度

海外に留学してみたいけど不安がある。身近な場所で語学力を試したい。そんな皆さんに対応できるよう、福島大学には学生交流協定校から来る交換留学生・短期留学生達のサポートをする「バディ」制度があります。バディとして留学生達と関わることで、彼らの文化を直接感じ、福島にしながら国際交流ができます。グローバル人材へのファーストステップとして貴重な機会となります。



多彩なプログラムで世界を学ぶ 短期研修・演習

実施期間：10日～5週間

長期休暇を利用して行う短期研修・演習では、海外の協定締結大学で語学を学んだり、フィールドワークを体験することができます。例えば、コロラド州立大学ではアメリカの放射線研究について学ぶことができます。このほか韓国、中国、台湾、カナダ、オーストラリア等での語学研修など、多彩なプログラムが用意されています。



協定締結校への長期留学 交換留学

派遣期間：半年または1年

本学は、大学間交流協定に基づき、海外の38大学と学生交流協定を締結し、「交換留学」を実施しています。「交換留学」とは学生交流協定校への長期留学で、福島大学のみに学費を納める必要がある留学を指します。国際交流センターが留学先との調整役を務めるので、留学の準備から留学中の相談、帰国後の単位の互換まで、さまざまな手続きも安心して行うことができます。



海外で働くために必要なことを学ぶ 海外インターンシップ

実施期間：約2ヶ月

2016年度からスタートした海外インターンシップ講座「WEA」は、「実際の現場で英語を使うことにより実用的な英語を身につける」がテーマです。海外で仕事をするには何が必要なのかを考えながら、海外で働くためのスキルや知識を学びます。その後、夏休みに渡米して、現地でインターンシップを行います。

例 Real English Business Internshipプログラム(テキサス・ヒューストンでの8週間のインターン)など



専門家の指導も受けられる 語学力強化

開催期間：毎日(月曜～金曜)

英語圏への交換留学などをを目指す学生に求められるのが、IELTSTMやTOEFL[®]などの語学試験で目標スコアをクリアすることです。福島大学では、少数数制の語学力強化プログラムや、語学試験のコーチングで語学力アップをサポートしています。中でも国際交流センターが提供する「C1 Project」は、語学試験対策の専門家によるきめ細やかな受験指導に人気が集まっています。



奨学金制度について

「留学の費用に不安がある」という方も安心してください。福島大学には経済的な負担軽減を目的とした給付型の奨学金制度が準備されています。2023年度は、交換留学、短期研修、海外インターンシップに参加したほとんどの学生が奨学金を受給しました。

詳しくは、国際交流センターにお問い合わせください！

Fukushima University International Center

国際交流センター

平日 9:00～12:30 / 13:30～17:00

福島大学国際交流センターは、国際交流の窓口として学生の皆さんのサポートや、情報発信を行っています。ここでは、本学と学術・学生交流協定を締結している大学の情報や、留学の報告書なども閲覧することができます。また留学や語学学習に関する図書の貸出や、希望者には語学試験対策学習指導も提供しています。留学に関わる生活や学習の相談、在留資格、地域のイベント案内、手続きなどもここで確認することができます。



交換留学

高校時代から憧れだった長期留学 失敗を恐れずに挑戦を重ねています。

行政政策学類 地域社会と文化コース3年
[新潟県立燕中等教育学校出身]

岩間 弓菜さん

留学先 ノーサンブリア大学[イギリス] (2023年9月14日～2024年6月19日)

※学年は取材当時のものです。



ノーサンブリア大学では留学生の割合が高く、国際色豊かなキャンパスで学んでいます。

今セメスターでは社会学と犯罪学から3つの科目を履修し、社会学ではジェンダーや貧困などの社会的不平等の問題について、犯罪学ではイギリスの刑事司法制度や少年犯罪について学んでいます。講義を聞くレクチャーと課題を討論するセミナー形式の授業があります。セミナーのグループ討論では自分の意見を積極的に発言することが重要であり、始めは戸惑いましたが、徐々に発言することが出来るようになりました。

EU離脱や階級社会など、イギリスならではの話題や視点で考える授業が面白いです。

キャンパスにある寮で暮らしており、一人部屋でキッチンとバスルームは共用です。ダイニングルームがあり、1日2食付きです。ランチは友達と食べに行ったり、大学内のお店を利用したりしています。毎週月曜日の夜には、近くの教会で「グローブカフェ」という留学生たちが交流できるイベントがあり、よく参加しています。クリスマスや大晦日などの季節の行事も、友人や他の留学生たちと一緒に満喫しました。

高校生の頃から異文化交流や英語で専門分野を学ぶことに興味があり、留学したいと考えていたのですが、思い切って挑戦して良かったと心の底から思います。

短期研修

ソウルの街の賑わいやネイティブの表現、 留学での体験が、次の目標に繋がりました。

人間発達文化学類 心理学・幼児教育コース 2年
[青森県立三本木高等学校出身]

伊瀬谷 瞳子さん

留学先 中央大学校[韓国] (2023年8月1日～2023年8月18日)

※学年は取材当時のものです。



大学の外国語コミュニケーション科目で韓国語を履修しており、まとまった時間のある学生の夏休みにしかできないことをと思い、短期語学留学に参加しました。授業は語学と文化体験の2つに分かれていて、文化体験では韓国の伝統衣装を着ての観光や、韓国の経済発展についての講義を聞きました。

中学の時からK-POPが好きで、X(旧twitter)やアプリでファンと交流はしていたのですが、本格的に発音や文法を始めたのは大学の授業からです。語学の授業は上級・中級・初級に分かれていて、私は中級クラス。授業がすべて韓国語だったので耳も鍛えられましたし、滞在期間中に使える

ネイティブの表現が中心の授業だったので、「現地の人はこういう表現を使うんだ」と感動していました。滞在先は大学の寮ですが、電車やバス1本で明洞(ミョンドン)に行ける恵まれた環境で、先生も「勉強も大切だけど、せっかくだから現地の体験をしなさい」とおっしゃったので、観光や買い物も満喫しました。

滞在中に、より韓国語を勉強したいという気持ちが高まり、去年12月には韓国語のスピーチコンテストに参加して、2人1組で行うスキット部門で全国3位になりました。次は長期留学を考えています。もっと自信を持って話せるよう学びを深め、現地の友だちをたくさん作りたいと思っています。